０５１０１７

第５１回 労働衛生コンサルタント試験

（労働衛生一般）

指示があるまで、試験問題を開かないでください。

〔注意事項〕

１　解答方法

（１）　解答は、別の解答用紙に記入（マーク）してください。

（２）　使用できる鉛筆（シャープペンシル可）は、「ＨＢ」又は「Ｂ」です。
ボールペン、サインペンなどは使用できません。

（３）　解答用紙は、機械で採点しますので、折ったり、曲げたり、汚したりしないでください。

（４）　解答を訂正するときは、消しゴムできれいに消してから書き直してください。

（５）　問題は、五肢択一式で、正答は一問につき一つだけです。二つ以上に記入（マーク）したもの、判読が困難なものは、得点としません。

（６）　計算、メモなどは、解答用紙に書かずに試験問題の余白を利用してください。

２　受験票には、何も記入しないでください。

３　試験時間は２時間で、試験問題は問１～問３０です。

４　試験開始後、１時間以内は退室できません。
試験時間終了前に退室するときは、着席のまま無言で手を上げてください。
試験監督員が席まで伺います。
なお、退室した後は、再び試験室に入ることはできません。

５　試験問題はお持ち帰りください。

問　１　事業場における労働衛生の三管理（作業環境管理、作業管理及び健康管理）について、その種類と取組内容に関する次のイ～ホの組合せについて、適切なもののみを全て挙げたものは（１）～（５）のうちどれか。

	労働衛生管理の種類	労働衛生に関する取組内容
イ	作業管理 ・・・・・・・・	腰部に著しい負担のかかる作業に従事する労働者に対し、腰痛予防体操を実施する。
ロ	作業環境管理 ・・・・・	アーク溶接作業を行う労働者に防じんマスクなどの保護具を使用させることによって、有害物質に対するばく露量を低減する。
ハ	作業管理 ・・・・・・・・	有機溶剤業務を行う作業場所に設置した局所排気装置のフード付近の気流の風速を測定する。
ニ	健康管理 ・・・・・・・・	健康診断結果に基づく事後措置として就業制限を行う。
ホ	作業環境管理 ・・・・・	ずい道建設工事の掘削作業において、土石又は岩石を湿潤な状態に保つための設備を稼働する。

（１）イ　　ロ
（２）イ　　ハ　　ニ
（３）ロ　　ニ　　ホ
（４）ハ　　ホ
○（５）ニ　　ホ

問　２　厚生労働省の労働衛生統計等に関する次のイ～ニの記述について、誤っているもののみを全て挙げたものは（１）～（５）のうちどれか。

イ　厚生労働省が公表している「労働災害発生状況」によると、休業４日以上の死傷者数は、平成24年から令和３年までの10年間、年々減少傾向にあり、令和３年は約15万人である。

ロ　厚生労働省の「業務上疾病調」によると、令和３年の業務上疾病者数は、疾病別では、新型コロナウイルス感染症罹(り)患によるものを除くと、災害性腰痛などの負傷に起因する疾病が最も多く、約6,700人となっている。

ハ　厚生労働省の「じん肺健康管理実施結果調」（随時申請によるものを除く。）によると、じん肺健康診断受診労働者数に対する有所見者数の割合は、平成14年以降の20年間減少傾向にあり、令和３年は約３％となっている。

ニ　厚生労働省の「労働安全衛生調査（実態調査）」によると、現在の仕事や職業生活に関することで、強いストレスとなっていると感じる事柄がある労働者の割合は、令和３年は約30％である。

（１）イ　　ロ
○（２）イ　　ハ　　ニ
（３）イ　　ニ
（４）ロ　　ハ
（５）ロ　　ハ　　ニ

問　３　有害物質の性状等に関する次のイ～ホの記述について、誤っているものの組合せは（１）～（５）のうちどれか。

イ　一般に、ミストはヒュームの一次粒子に比べて粒径が大きい。
ロ　メタノールは、トルエンより極性が大きい。
ハ　一般に、環境空気中の有害物質の濃度の算術平均値と、その標準偏差の間には相関関係はない。
ニ　粉じんの空気力学相当径は、光学顕微鏡による粒径測定によって求められる。
ホ　臨界温度以下の温度において、気体として存在するものを蒸気という。

（１）イ　　ロ
（２）イ　　ホ
（３）ロ　　ハ
○（４）ハ　　ニ
（５）ニ　　ホ

問　４　厚生労働省の「第10次粉じん障害防止総合対策」における粉じん障害を防止するため事業者が重点的に講ずべき措置に関する次の記述のうち、適切でないものはどれか。

（１）ずい道等建設工事に従事するじん肺有所見労働者に対し、禁煙について強く働きかける。
（２）ずい道等建設工事において、コンクリート等を吹き付ける場所での作業では、防じん機能を有する電動ファン付き呼吸用保護具を使用させる。
（３）「保護具着用管理責任者」を選任し、防じんマスクの適正な選択等の業務に従事させる。
（４）じん肺健康診断を実施し、毎年じん肺健康管理実施状況報告を提出する。
○（５）粉じん作業に従事し、じん肺管理区分が管理３又は管理４の離職予定者に対し、「離職するじん肺有所見者のためのガイドブック」を配付する。

問　５　電離放射線に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

（１）エックス線とガンマ線の区別は発生機序の相違による。
○（２）ベータ線はアルミニウムなどの金属板を透過する。
（３）人間の五感では感じることができない。
（４）防護の目的に用いられる等価線量の単位は、Sv（シーベルト）である。
（５）原子又は分子の電子を放出させる作用を持つ。

問　６　高気圧障害の予防に関する次のイ～ニの記述について、正しいものの組合せは（１）～（５）のうちどれか。

イ　呼吸ガスの酸素分圧は制限なく増加できる。
ロ　気こう室から十分離れた場所に連絡等の担当者を常時配置する。
ハ　水深40mを超える潜水作業では、ヘリウム混合ガスを呼吸ガスとする。
ニ　酸素ばく露量の算出の際は、UPTD（肺酸素毒性量単位）をその単位として用いる。

（１）イ　　ロ
（２）イ　　ハ
（３）イ　　ニ
（４）ロ　　ハ
○（５）ハ　　ニ

問　７　酸素欠乏症及び硫化水素による健康障害とそれらの予防に関する次の記述のうち、適切でないものはどれか。

（１）ドライアイスが昇華すると酸素欠乏症のリスクが生じる。
○（２）酸素欠乏空気には鋭敏な人が検知できる特有の臭いがある。
（３）硫化水素用の防毒マスクは、酸素濃度18%以上のときに使用できる。
（４）海水が滞留している暗渠（きょ）では、酸素欠乏症及び硫化水素中毒のリスクがある。
（５）硫化水素にばく露したときの眼の症状として、結膜炎や角膜損傷が知られている。

問　８　騒音性難聴に関する次のイ～ニの記述について、正しいものの組合せは（１）～（５）のうちどれか。

イ　大きな音に長期間さらされ、内耳の有毛細胞が障害されて生じる。
ロ　聴力低下の左右差が大きい。
ハ　初期変化として、4,000Hz付近のdip型の聴力低下が生じる。
ニ　効果的な治療法が既に確立されている。

（１）イ　　ロ
○（２）イ　　ハ
（３）イ　　ニ
（４）ロ　　ハ
（５）ハ　　ニ

問　９　熱中症に関する次のイ～ニの記述について、適切なもののみを全て挙げたものは（１）～（５）のうちどれか。

イ　作業現場のWBGT値の低下は、天候による要因のみで起きる。

ロ　熱中症の労働衛生教育の対象者は作業を管理する者と労働者の両方であり、教育内容には、熱中症の症状・予防方法、緊急時の救急処置、熱中症の事例が含まれる。

ハ　熱中症の救急処置において、自力で水分・塩分摂取できる場合でも症状が回復しないときは、医療機関へ搬送する。

ニ　WBGT基準値は、暑熱非順化者に用いる値の方が、暑熱順化者に用いる値より大きな値となる。

（１）イ　　ロ
（２）イ　　ハ　　ニ
（３）イ　　ニ
（４）ロ　　ハ　　ニ
○（５）ロ　　ハ

問１０　厚生労働省の「テレワークの適切な導入及び実施の推進のためのガイドライン」における長時間労働対策に関する次のイ～ニの記述について、適切なもののみを全て挙げたものは（１）～（５）のうちどれか。

イ　所定外深夜及び休日は、事前に許可を得ない限り、社内システムにアクセスできないように設定する。
ロ　労使の合意により、時間外等の労働が可能な時間帯や時間数を、あらかじめ使用者が設定する。
ハ　一日の勤務終了後から翌日の勤務までの間に一定時間以上の休息時間を設ける勤務間インターバル制度を採用する。
ニ　長時間労働が生じた労働者に対しては、管理者が労働時間の記録を踏まえて注意喚起する。

○（１）イ　ロ　ハ　ニ
（２）イ　ロ　ハ
（３）イ　ニ
（４）ロ　ハ
（５）ハ　ニ

問１１　特殊健康診断に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

（１）一般に、有機溶剤は生物学的半減期が短いので、有機溶剤等健康診断における尿中の代謝物の量の検査のための採尿の時刻は、厳重に管理する必要がある。
（２）テトラクロロエチレンの特殊健康診断における生物学的モニタリングの指標には、尿中に排泄（せつ）されるトリクロロ酢酸がある。
（３）振動工具取扱い作業者に対する特殊健康診断を１年に２回実施する場合、そのうち１回は冬季に行うとよい。
○（４）情報機器作業に係る健康診断では、眼科学的検査などとともに、上肢及び下肢の運動機能の検査を行う。
（５）介護・看護作業に常時従事する労働者に対しては、当該作業に配置する際及びその後６か月以内ごとに１回、定期に、医師による腰痛の健康診断を行う。

問１２　メタボリックシンドロームの診断のための各項目の基準として、適切でないものは次のうちどれか。

（１）女性では、ウエスト周囲径（へその高さの腹囲）が90cm以上である。
（２）150mg/dL以上の高トリグリセライド血症がある。
（３）110mg/dL以上の空腹時高血糖がある。
○（４）拡張期血圧が80mmHg以上である。
（５）40mg/dL未満の低HDLコレステロール血症がある。

問１３　厚生労働省の「第14次労働災害防止計画」における労働者の健康確保対策の推進に関し、労働者の協力を得て事業者が取り組む事項についての次の記述のうち、適切でないものはどれか。

（１）ストレスチェック結果をもとに集団分析を行い、その集団分析を活用した職場環境の改善まで行うことで、メンタルヘルス不調の予防を強化する。
（２）年次有給休暇の確実な取得を促進する。
○（３）育児と仕事の両立支援に関して、労働者や管理監督者等に対する研修の実施等の環境整備に取り組む。
（４）長時間労働による医師の面接指導の対象となる労働者に対して、医師による面接指導や、保健師等の産業保健スタッフによる相談支援を受けるよう勧奨する。
（５）職場におけるハラスメント防止対策に取り組む。

問１４　物理的因子と障害の部位との次の組合せのうち、適切でないものはどれか。

	物理的因子	障害の部位
（１）	赤外線	水晶体
（２）	レーザー光線	角膜
（３）	電離放射線	生殖腺
○（４）	手腕振動	中枢神経
（５）	減圧	中枢神経

問１５　加齢による人体の機能の変化に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

（１）筋持久力の指標である上体起こしは、男性で60～64歳にはピーク時の約６割まで低下する。

○（２）全身持久力の指標である20ｍシャトルラン（往復持久走）は、男女とも40歳頃から著しい低下傾向を示す。

（３）女性の更年期は、閉経を迎える前後をいい、エストロゲンの分泌が低下することによる更年期障害を伴う。

（４）女性の更年期には、子宮、膣（ちつ）、尿道、膀胱（ぼうこう）、毛髪、皮膚、骨などの器官が萎縮してくる。

（５）男性では、テストステロンの分泌の低下により、筋力低下、自律神経失調症状や精力減退などを生じる。

問１６　金属類による健康障害に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

（１）マンガンによる慢性中毒では、神経質になるなどの精神症状、歩行障害、発語障害などのパーキンソン病に似た症状がみられる。

（２）クロム酸などの六価クロムの化合物は、皮膚に接触すると、局所の刺激で充血、水疱（ほう）や潰瘍がみられ、長期間のばく露によってアレルギー性接触性皮膚炎がみられる。

（３）鉛中毒では、貧血、腹部の疝（せん）痛、末梢（しょう）神経障害、伸筋麻痺（ひ）による下垂手がみられる。

○（４）ニッケルは、粉じんやヒュームが経気道的に吸入されると、気管支喘（ぜん）息などのアレルギー症状や肝障害がみられる。

（５）砒（ひ）素の慢性中毒では、色素沈着症、黒皮症、角化症、鼻中隔穿（せん）孔、末梢神経障害がみられる。

問１７　作業環境測定を行う際に注意すべき事項に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

（１）混合有機溶剤の場合、溶剤中の含有率が低い物質であっても、高い蒸気圧を有するなど物性によっては環境空気中の濃度が高くなる場合がある。

（２）取り扱う原材料によっては、温度などの条件や生産工程の進み具合によって、有害物質の発散の程度が変動する。

○（３）別々の発散源から発散した複数の有機溶剤が空気中で混合する場合は、混合有機溶剤を取り扱う一つの単位作業場所として評価する。

（４）測定対象物質がどのような形態で発散し、どのような状態で環境空気中に存在するかを理解する。

（５）測定対象作業場の主たる業務のほかに、付随的な業務で法的に測定義務のある物質を発散する業務が行われることがあるので、作業環境測定士、衛生管理者、作業主任者などの間で事前の打合せを行い、作業の実態を十分に把握する。

問１８　作業環境測定（Ａ・Ｂ測定）のデザインに関する次の記述のうち、適切でないものはどれか。

（１）過去において実施した作業環境測定の記録により、測定値の幾何標準偏差がおおむね1.2以下である場合には、測定点を６ｍを超える等間隔で引いた縦横の線の交点とすることができる。

○（２）Ａ測定では、単位作業場所の範囲が著しく狭い場合であって、単位作業場所における有害物質の濃度がほぼ均一であることが明らかな場合に、測定点の数を５未満としたときは、測定値の総数は５以上にしなくてもよい。

（３）単位作業場所の範囲は平面的な場所だけではなく、有害物質の発生場所を取り巻くように設置された作業足場のような立体的なものとなる場合もある。

（４）単位作業場所は、労働者の作業中の行動範囲、作業に伴って発散する有害物質の分布等の状況等によって決定する。

（５）Ａ測定の２日間測定は、有害物濃度の日間変動を加味した測定結果を得るためであるが、合理的な理由がある場合は、連続する二作業日に実施しなくてもよい。

問１９　局所排気装置に関する次のイ～ホの記述について、誤っているものの組合せは（１）～（５）のうちどれか。

イ　制御風速とは、有害物により汚染された空気を有害物の発生点において捕捉するために必要な最小風速をいう。

ロ　ダクトは、曲がり部分をできるだけ少なくするよう配管し、主ダクトと枝ダクトの合流角度は45°を超えないようにする。

ハ　排風量一定の条件では、ダクトの断面積を小さくすると、圧力損失は大きくなる。

ニ　スロット型フードは、作業面を除き、周りが囲われているもので、囲い式フードに分類される。

ホ　囲い式フードのうちのドラフトチェンバー型、カバー型及び建築ブース型では、カバー型が最も排気効果が高い。

（１）イ　　ロ
○（２）イ　　ニ
（３）ロ　　ハ
（４）ハ　　ホ
（５）ニ　　ホ

問２０　事務室の採光、照明などに関する次のイ～ニの記述について、適切なもののみを全て挙げたものは（１）～（５）のうちどれか。

イ　照度は高いほど書類の文字はよく見えるが、明る過ぎると疲労度が増す。

ロ　全般照明の照度は、局部照明による照度の少なくとも約10分の１以上が望ましい。

ハ　室内の明るさにムラがないようにする。

ニ　前方から明かりをとるときは、まぶしさを防ぐため、光源と眼を結ぶ線と視線がなす角度は30°以下となるようにする。

（１）イ　ロ　ハ　ニ
○（２）イ　ロ　ハ
（３）イ　ハ　ニ
（４）ロ　ハ
（５）ロ　ニ

問２１　化学物質等の有害性等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

（１）変異原性試験は発がん性のスクリーニングとして実施されているが、発がん性のあるものが変異原性を有するとは限らない。
○（２）特定標的臓器毒性（反復ばく露）とは、反復ばく露によって起こる特定臓器に対する特異的な致死性の毒性をいう。
（３）神経毒性とは、神経機能を障害する性質をいい、神経毒性を持つ金属として、有機水銀などがある。
（４）窒息性とは、窒素やヘリウムなどのガスが、酸素の供給を妨げることで窒息させる性質をいう。
（５）感作性とは、皮膚や呼吸器にアレルギー反応を引き起こす性質をいう。

問２２　安全データシート（SDS）に用いられる次のＡ～Ｃの絵表示と、それらが表す危険有害性クラス及び危険有害性区分の組合せについて、正しいものは（１）～（５）のうちどれか。

A

B

C

	A	B	C
○（１）	急性毒性（区分１）	急性毒性（区分４）	呼吸器感作性（区分１）
（２）	急性毒性（区分１）	皮膚腐食性（区分１）	皮膚感作性（区分１）
（３）	発がん性（区分１）	呼吸器感作性（区分１）	生殖細胞変異原性（区分１）
（４）	発がん性（区分１）	発がん性（区分２）	誤えん有害性（区分１）
（５）	生殖毒性（区分１）	生殖毒性（区分２）	皮膚腐食性（区分１）

問２３　高年齢労働者の感覚や反応に関する次の記述のうち、適切でないものはどれか。

（１）加齢による聴力低下では、高い周波数から聞こえにくくなる。
○（２）静止視力は、動体視力よりも加齢により著しく低下する。
（３）加齢により、単純反応時間及び選択反応時間は、ともに長くなる。
（４）加齢に伴う明暗順応の遅延は、明順応よりも暗順応の方が顕著である。
（５）平衡機能は加齢により徐々に低下し、60歳代以降に大きく低下する。

問２４　厚生労働省の「職場における腰痛予防対策指針」に関する次の記述のうち、適切でないものはどれか

（１）長時間の車両運転作業では、一連続運転時間の長さを適切に管理することが重要となる。
（２）介護作業では、不自然な姿勢を取らざるを得ない場合、壁に手をつく、床やベッドの上に膝を着く等により体を支える。
（３）２人以上で重量物を取り扱う作業は、身長差の少ない者にて行う。
○（４）椅座位姿勢は、長い時間続けると背部筋の疲労によって後傾姿勢となることから、適宜、前傾姿勢をとるようにする。
（５）立ち作業では、おおむね１時間につき１～２回程度の小休止・休息をとるようにする。

問２５　労働衛生保護具に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

（１）直結式小型防毒マスクは、大気中で対象ガス又は蒸気の濃度が0.1%以下で使用する。
（２）酸性ガス用防毒マスクの吸収缶の色は灰色で、シアン化水素用防毒マスクの吸収缶の色は青色である。
○（３）放射性物質がこぼれたとき等による汚染のおそれがある区域内の作業においてオイルミストが混在しない場合は、ろ過材の種類がＲＬ３の防じんマスクは使用できない。
（４）取替え式防じんマスクの密着性を確認する方法には、陰圧法と陽圧法がある。
（５）酸素濃度が18%未満の場所でも使用できる呼吸用保護具には、送気マスク、空気呼吸器、酸素呼吸器がある。

問２６　派遣労働者に対する安全衛生教育に関する次のイ～ホの記述について、適切なもののみを全て挙げたものは（１）～（５）のうちどれか。

ただし、ホにおいて、特別教育とは、危険又は有害な業務で、厚生労働省令で定めるものに労働者を就かせるときに行う当該業務に関する安全又は衛生のための特別の教育をいうものとする。

イ　派遣先事業者は、派遣労働者を受け入れたときは、派遣元事業者による雇入れ時の安全衛生教育について、当該派遣労働者が従事する業務に関する安全又は衛生を確保するために必要な内容の教育が実施されているか等、その実施結果を派遣元事業者に書面等により確認する。

ロ　派遣元事業者は、派遣先事業者に対して派遣労働者の雇入れ時の安全衛生教育の実施を委託した場合は、その実施結果を書面等により確認する。

ハ　派遣元事業者は、派遣労働者の派遣先事業場を変更する等その作業内容を変更したときは、当該派遣労働者に対し、作業内容変更時の安全衛生教育を実施する。

ニ　派遣元事業者は、派遣先事業場において派遣労働者を異なる作業に転換したとき等派遣労働者の作業内容の変更を把握した場合には、派遣先事業者が行った作業内容変更時の安全衛生教育の実施結果を書面等により確認する。

ホ　派遣先事業者は、特別教育が必要な業務に派遣労働者を従事させるときは、当該派遣労働者が当該業務に関する特別教育を既に受けた者かどうか等を確認し、当該派遣労働者に対し、必要な特別教育を適切に行うとともに、その実施結果を派遣元事業者に書面等により報告する。

○（１）イ　ロ　ハ　ニ　ホ
（２）イ　ロ　ハ　ニ
（３）イ　ロ　ニ　ホ
（４）イ　ハ　ニ
（５）ロ　ハ　ホ

問２７　1,200人を対象としたある疾病のスクリーニング検査の結果と精密検査の結果によるその疾病の有無が下表のとおりであったとき、このスクリーニング検査の感度（敏感度）の値及び特異度の値の組合せとして、適切なものは（１）～（５）のうちどれか。

		精密検査結果による疾病の有無(人)	
		疾病あり	疾病なし
スクリーニング検査結果(人)	陽性	45	100
	陰性	5	1,050

	感度(敏感度)	特異度
（１）	31.0%	99.5%
（２）	31.0%	91.3%
○（３）	90.0%	91.3%
（４）	90.0%	87.5%
（５）	99.5%	87.5%

問２８　安全管理等に関する次の記述のうち、適切でないものはどれか。

（１）労働災害防止は事業者の責務であり、この責務を全うするには、何よりも事業場トップが労働者の安全と健康の確保を自らの課題として認識し、率先してこれに取り組むことが必要である。

（２）４Ｓ活動は、職場の「整理」、「整頓」、「清掃」、「清潔」を行う活動であり、そのうち「清掃」とは、通路、作業床から機械設備、治工具、作業用具に至るまで、汚れ、くず、ほこりのない状態にすることであるとともに、「整理」、「整頓」の仕上げの役目も持っている。

（３）労働災害の直接原因は、労働者の不安全な行動という人的原因と、設備、原材料、環境等の不安全な状態という物的原因とに分けることができる。

（４）国の労働災害防止計画は、産業災害や職業性疾病の急増を踏まえ、1958年（昭和33年）に第１次の計画が策定された。

○（５）第14次労働災害防止計画では、計画の重点事項の取組の成果として、労働者の協力の下、事業者において実施される事項をアウトカム指標として定め、また、事業者がアウトカム指標に定める事項を実施した結果として期待される事項をアウトプット指標として定めている。

問２９　厚生労働省の「労働安全衛生マネジメントシステムに関する指針」の内容及びこれに基づく労働安全衛生マネジメントシステムの運用に関する次の記述のうち、適切でないものはどれか。

（１）事業者は、あらかじめ、労働災害発生の急迫した危険がある状態（緊急事態）が生ずる可能性を評価し、緊急事態が発生した場合に労働災害を防止するための措置として、被害を最小限に食い止め、かつ、拡大を防止するための措置等を定める。

（２）指針の内容は、労働安全衛生法の規定に基づき機械、設備、化学物質等による危険又は健康障害を防止するため事業者が講ずべき具体的な措置を定めるものではない。

○（３）事業場外部の者によるシステム監査は、事業場内部の者によるシステム監査に比べて、事業場の規程や基準等と実態との乖（かい）離を具体的に見つけだすことができる。

（４）事業者は、安全衛生計画を実施する手順や日常的な点検、改善を実施する手順については、いつ、誰が、何を、どのようにするか等について文書により定める。

（５）法人が同一である複数の事業場を一の単位として労働安全衛生マネジメントシステムに従って行う措置を実施する場合、システム各級管理者には、当該単位においてその事業の実施を統括管理する者が含まれる。

問３０　厚生労働省の「化学物質等による危険性又は有害性等の調査等に関する指針」に関する次のイ～ホの記述について、誤っているものの組合せは（１）～（５）のうちどれか。

イ　リスクとは、「危険性又は有害性」のことで、ILOにおいて「危険有害要因」と表現されているものに相当する。

ロ　リスクアセスメント実施の際に入手する災害事例、災害統計等には、ヒヤリハットの記録も含まれる。

ハ　重篤度の見積りは、傷害や疾病等の種類にかかわらず、基本的に、負傷又は疾病による休業日数等を尺度として使用する。

ニ　化学物質等のばく露限界には、管理濃度、ACGIH（米国産業衛生専門家会議）のTLV-TWA等が含まれる。

ホ　個人ばく露濃度をばく露限界と比較する手法によりリスクを見積もった結果、ばく露濃度がばく露限界を相当程度下回る場合は、リスク低減措置を検討する必要はない。

（１）イ　　ロ
○（２）イ　　ニ
（３）ロ　　ハ
（４）ハ　　ホ
（５）ニ　　ホ

（終　り）